

カップルは、何度でも復活する。
南海部 覚悟

京都府警本部、刑事部長の永山はその朝、刑事部屋に懐かしいカップルの姿を見付けて、ほっとしていた。

二人の笑顔に深い親しみと、しっかりとした頼もしさを感じとっていた。

部屋に入るなりカップルの隣に立つ、全員が襟を正して言葉を待った。

刑事たちの、活き々と上気した顔をゆっくりと見渡すと、「―――本日より黒木警部、白河刑事が復帰する。云うまでもないが、二人はわが刑事部のエースだ、気心知れた仲間だ、信頼できるスタッフだ。休職前同様に二人を頼ってほしい、お互いに助け合い業務に励んでほしい・・・本日付で本庁より捜査係長昇進の辞令が届いている。黒木係長、何かないか？」

永山に促された玲子が、深く一礼して、「―――半年の間、ご心配とご迷惑をおかけしました。やっと二人揃って此処に帰ってくる事が出来ました、我儘が叶いました・・・そして此処にいるみんなが、私の命の恩人であることは、私の心に深く刻み込んでいます・・・本当に有り難うございます、係長と云う責任ある立場で、少しでも皆さんに恩返し出来るよう全力で努力いたします、以前同様これからも、どうか宜しく願いいたします・・・。」

神妙な表情の笑子共々、再度深々と頭を下げる。

長かった髪を、短く切り揃えたカップルを愛おしげに見ながら、永山が感慨深げに声を掛ける、「よく帰って来てくれた・・・本当に、お帰りなさい。」

刑事部屋の全員が、口々に、「―――お帰りなさい。」「―――お帰りなさい。」

交通機動隊の秋山修平は、その日も気持ちが沈んでいた。

白バイによる午前中パトロールの後、決まってエアロバイクの操縦訓練である。

昼食後、京都府警の2輪車訓練場に集合し、夕方までの飛行訓練をこの2週間続けている。

高いところの苦手な秋山としては、気が滅入る訓練であった。

エアロバイクとは、一人乗り乗用ドローンのことである。

全固体電池や、リチウム空気電池の実用化に伴って、世界中に普及し始めた。

日本に於いては、空中架線(電線)の障害があって、海外と比較して普及が酷く遅れている。

それでも行く々は、安定核原子力発電システムの普及と並行して、パーソナルな移動手段の主力と期待される、航空機技術である。



秋山が半月前にエアロバイクの実物を初めて見たときの驚きは、ちょっとしたものだった。

直径50cm程のカーボン樹脂製ロッドで組まれた測地線球体 (まるで竹籤で編んだ玉籠だ) の赤道面にあたる部分にプロペラが水平に取り付けられている。

その籠をドーナツ状に八つ連結し、丁度ミストのポンデリングのような形態で、ドーナツの穴の部分からコンソールパネルとパイロットシートから成るコクピットが、パイプフレームでぶら下げられている。

プロペラと駆動モーターは、ジンバル機構によって球体内部で自由に角度を変えられる。

一般のラジコンドローンが、プロペラ回転数の差動により機体をコントロールするのに比べて、直接推力の方向を変えることで、より安定した制御が可能となる。

ドーナツ穴の上部には、樹脂製カバーの中にパラシュート、コクピット下部のシート下には、窒素ガスボンベと全固体電池モジュールが取り付けられ、それらを連結するカーボン樹脂製パイプが、同時にランディングギアを兼ねている。

機体が全揚力を失った場合、窒素ガスをノズルから噴射して必要な高度を確保し、パラシュートを展開して機体共々パイロットの生命を守る仕組みだ。

全重量30kg、なんとも可笑しなデザインの代物であった。

せめて単純なドーナツ型、つまりポンデリングじゃなくてイーストドーナツやフレンチクルーラーの形態にすれば、もっとすっきりするんじゃないのか？

教官に確認すると、プロペラ・モーターと玉籠のユニットは、4個から12個の範囲で自由に組み替え可能で、離陸重量を調節するんだそうだ。

その日の訓練に於いても、隊員の体重別に6個の者、8個の者、10個の者、様々であった。

また、破損したプロペラが他のプロペラに損傷を与えない意味もある。

操縦席の後ろに、アルミパイプフレームにナイロン生地を張った簡易担架が固定されている。

人命救助用らしく、担架に座らせるか寝させるかして、付属するハーネスで固定して要救助者を運べる。

航空法が改正され、この手の飛行物体の飛行禁止空域が、特に公的機関の運用に於いては、大幅に緩和された。

――今日は、訓練場上空600mまで上昇して降りてくる、エアロバイク初心者にとって多分過酷な訓練だ。

台形のパイプフレーム中央に固定されたシートに腰を下ろす、4点式ベルトを装着し、コンソールのスタートボタンを押す。

フェザリング状態のまま八つのプロペラが回転を始め、深呼吸で気持を落ち着かせスロットルレバーを恐る々押し出すと、プロペラにピッチが加わっていとも簡単に上昇する。

可変ピッチ機構は、電動プロペラの場合必要なさそうに思えるが、オートローテーション降下の場合に有用だ。

高層ビルの上昇エレベータに似た、居心地の悪さに耐えながら高度600mに達すると、一分間のホバリングに入る。

風を受けながらの空中停止で、プロペラのジンバルが細かく稼働する。

西の空がどんよりと曇って、明日から数日間雨の予報だ。

時計を確認しながら、一気にスロットルを引き戻した途端、視界が真っ暗になって気を失った。

――四日後。

京都府宇治市にある天ヶ瀬ダムの上空は、朝から雨雲が低く垂れこめ、季節外れの豪雨の名残が、まだしつこく降り続いていた。



「どうだい、娘さんの様子は？」

「だいぶ落ち着いてますよ、何もかも喋って気が晴れたんでしょう。」

「この忙しいのに、迷惑な話しだなあ・・・。」

ダム管理支所の所長が、窓外のアーチ式コンクリート堤体を見下ろしながら呟く。

「昼過ぎに、京都府警の刑事が迎えに来るようです・・・。」

オペレーションパネルのゲージを見詰めていたスタッフが、「それより、ダムの貯水量が急速に上昇しています。昨日までの豪雨で、琵琶湖の水量が増えてるようで、さっき瀬田川洗堰の放流を30%増やすって、統合管理事務所から連絡がありました。」

「放流に関して、宇治市から回答は？」

「まだありません、流域自治会への避難準備の周知に手間取っているようで・・・。」

「市から回答あり次第、警報を発報して毎秒600 t に増やす。統合管理事務所に連絡を入れておいてくれ。」

腕を組んだ顔が険しくなって、「18年前の台風の時のようなことにならなけりゃいいが・・・。」

「朝から急な話で悪いが、宇治の天ヶ瀬ダムまで、若い女性を一人迎えに行ってほしい。」

刑事部長室に呼ばれたカップルが、永山から指示を受けている。

「豪雨の中、ダムの天端道路を一人で歩いているのを、管理支所のスタッフに保護された。どうやら自殺志願だったらしい、或る若手政治家との不倫の話をしてると云うから、放っちゃ於けない。本部に連れてきて事情聴取して欲しいんだ。」

「天ヶ瀬ダムって云いますと、平等院の上流の？」

スマホで地図を検索しながら笑子が確認する。

「そうだ、この三日間の豪雨で、近畿のダムは何所も流量調整で大忙しだ。管理支所と

しても迷惑な話なんだろう・・・スタッフを重々労うのを忘れずに、豪雨の直後だから山道は落石や倒木の可能性がある、留意して行くように！」

「――それと話は変わるが、捜査一課に今日新人が一人着任する、名前を訊いたら吃驚するぞ！」

「――誰なんですか？」興味有り気に笑子が身を乗り出す。

「着任してからの楽しみだ・・・。」

エアロバイクの訓練も、三日間の豪雨で予定の変更を余儀なくされた。

600mの垂直上昇で、秋山他10名の失神者を出したにも拘らず、幾つかの工程を飛ばして、その日いきなりの滞空訓練に及んでいた。

訓練場のある伏見区から北上し、比叡山上空から琵琶湖に出る、南端の瀬田川に沿って南下し、天ヶ瀬ダムから宇治平等院上空を廻って帰ってくる、滋賀県警交通機動隊と合同の、長距離滞空訓練だった。

雨雲に霞む琵琶湖西岸比良山地上空を飛びながら、秋山は考える、『水平に飛行している限り、居心地の悪さや恐怖は感じない。但し思ったほどスピードが出ない、これで時に200km/hを越える深夜の暴走車両に追いつけるのだろうか？ひよっとすると、交通取り締まりに使う予定は無いのかも知れない。操縦席の後ろに人命救助用の担架が取り付けられていることからして・・・。』

隊列に従い、操縦桿を右に倒して琵琶湖の上に出る、湖面に霞が点々と張り付いて、何処までも幻想的な視界だった。

宇治市内からダムサイトに向かう府道は、幸いにも落石や倒木による交通障害は発生してなかった。

ただし、宇治川対岸の山肌には、所々崩落の傷跡が散見される。

天ヶ瀬ダム管理支所に到着すると、オペレーションルームに案内された。

自殺志願の若い女性は、奥の休息室で毛布に包まって寝ていた。

二十歳前後の、目鼻立ちのハッキリした美人である。

スタッフの対応を労い、女性が目を覚ますのを待って任意同行を求めることとした。

「皆さん、此処で寝泊まりするんですか？」

笑子の問いに、所長だという初老の男性が答える。

「――幸い市街地に近いですから、交替で自宅に帰るようにしています。ただし、今度のような豪雨になると、そんなことも云ってられませんので・・・。」

「――でも、此処からの眺めちょっと怖いすわね。」

淡い鶯色のオペレーションパネルの反対側が、大きな嵌め殺しのガラス窓になっていて、ダム堤体全面が見渡せるように、鉄骨で建物から突き出す形で取り付けられている。床にも強化ガラスの窓があって80m下の放流路が見える、高いところの苦手な玲子が、思わず足を竦める。

「―――所長、宇治市から放流同意の連絡がありました！」

ヘッドセットのマイクを押さえながら、スタッフの一人が声を上げる。

「よし、警報サイレン発報！20分後に常用ゲートから毎秒600 t で放流開始！」

テキパキしたスタッフの対応に、部屋の空気が引き締まる。

―――その時だった！

頭上から物凄い振動が部屋を襲い、直後に濃密な砂埃が浸入して何も見えなくなった。

エアロバイクの訓練隊は、瀬田川から宇治川へと名前を変えるダム湖に沿って南下していた。

豪雨のせいで水面が茶褐色に濁り、水量もかなり増えているようだ。

やがてアーチ型の天ヶ瀬ダムが視界に入り、左岸の根元に管理支所の銀色のコンクリート屋根が見えてくる。

宇治川が田上山地を西に抜け出て京都盆地に流れ出す、その出口に位置するこのダムは、堤体高さ73m、冬季には北西の季節風をもろに受けて、強い上昇気流を発生させる。

関西のヌアヌ・パリという別名で、京都・大阪の近郊観光地になっている。

今日はまだ雨雲が低く垂れこめ、小雨も降り続ける中、ダムサイトに人影は無かった。



秋山が、何気なしに管理支所上の山肌に視線を移すと、斜面に無数の割れ目が見て取れる、慌てて無線のスイッチを入れた直後、割れ目に沿ってゆっくりと山塊が動き出した。

「——山崩れだ！」

ダムサイトに沿って走る道路が、忽ち土石流に呑みこまれ、支所の駐車場を一気に押し出して、建物の周りを流れ下り、堤体の左岸から滝になって落下する。

1分もしないうちに管理支所の建屋は、土石流の巨大な岩に取り囲まれてしまった。

土埃が収まって気が付くと、支所のスタッフに抱きかかえられていた。

「大丈夫ですか刑事さん！」

耳元で男の大声が響き渡る。

「——だ、大丈夫です！私の同僚は？」

「大丈夫でえ～す！」

奥から笑子の甲高い声が聞える、見ると寝ていた女性の腕に両肩を入れて立ち上がらせようとしていた。

巨大な嵌め殺しガラスの窓が、鉄骨のフレームと共に落下し、オペレーションルームはそのまま外気に曝露されていた。

窓があった方向に恐る々近寄ると、「地面が崩落して無くなってる、建屋も傾いて危険だわ！」

「所轄警察に救助要請！全員屋上に避難！」

指示する所長の声の根が、震えていた。

全員が山崩れを目撃し、上空で旋廻待機していた秋山たちの目に、支所の屋上で手を振る職員たちの姿が捉えられた。

「―――救助に向かいます！」

ヘッドセットのマイクに向かって秋山が叫ぶ。

訓練隊の教官が制止する。

「救助ヘリを待ってたら、建屋自体崩落するかもしれません！操縦席後ろの救助用担架を使って―――。」

「救助した後、何処に降ろす積りだ！」

「右岸に丁度いい広場があります、あそこなら安全に全機着陸できます！」

他の訓練生から無線が入った。

教官の同意が早いか次々屋上に着陸し、一人ずつ担架に座らせハーネスで固定して離陸する、カップルと自殺志願の女性も同様だ、管理支所にいた10人全員の救助が完了したのは、山崩れから10分後であった。

上空に京都府警の救助ヘリが到着した直後、管理支所の建屋が真っ二つに割れて崖側が崩落した。

山側に残された建屋の残骸から、無数の書類が吹き上がり風に舞っている。

救助された広場から、管理支所の在った左岸を見渡すと、上部の山肌が大きく崩れ、灰褐色の岩盤が露出していた。

国土交通省と表示されたヘリが上空を何度か旋回し、やがて広場の端に着陸してきた。

駆け付けた所長が、ヘリのドアに半身を入れながら何か話している。

話し終ると、ヘリはそのまま離陸して帰って行った。

「―――どうかしたんですか？」

玲子が真剣な眼で尋ねる。

「毎秒600 t の放流を、まだ実施してなかったんです。このままじゃ貯水量が増加して、危険な状態になります。」

「オペレーションルームなしでどうするんですか？」

「枚方市にある統合管理事務所から、遠隔操作でゲートを開きます。ダムに隣接する管

理支所のオペレーションルームと較べて、レスポンスが悪くなりますが、全て同じ操作が出来ます。」

事故を訊きつけて、府警や消防の緊急車両が広場に集まってきた。

左岸のダムサイトを廻る府道3号線と違い、この広場に通じる道路は狭くて離合も儘ならない。

メディアの取材車両も含めて、つづら折れの山道が渋滞し始めた。

30分後にダムの常用ゲートが全開され、洪水吐きから勢いよく放水が始った。

管理支所のスタッフ2名が、タラップを伝って堤体のダム湖側に下り、水位ゲージを慎重に睨んでいる。

10分後に蒼い顔をして上がってきて所長に駆け寄ると、「駄目です、水位下がるどころか上がっています！流入を捌き切れません！」

「毎秒600 t 流してもまだ足らんのか！」

「統合管理事務所に連絡して、瀬田川洗堰の放流を減らして貰います！」

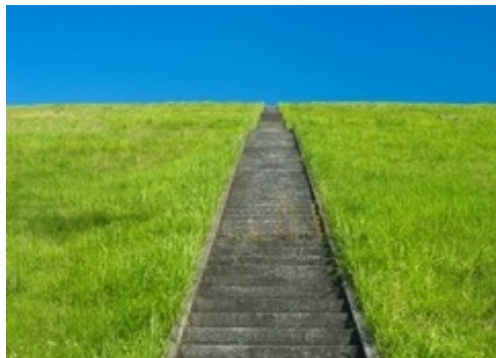
「琵琶湖全域の水位が上がってるんだろ・・・他県に無理も云えん。宇治市に協力要請、現在発令中の避難準備を避難勧告ないし避難指示に格上げして貰おう。統合管理事務所に連絡、1時間後に非常用ゲートを開放して毎秒1200 t 放流！」

「所長！非常用ゲートはまだ――。」

「――ああっ！そうだった！」

頭を抱えてその場にしゃがみ込んでしまった。

難しい顔で立ち上がり、カップルの方に向き直ると、「非常用ゲートは4基とも、メンテナンス中でした・・・統合管理事務所からの遠隔操作が出来ません。」



一台の黒パトが山道を登りきり、刑事部長の永山が降りてきた。

「復帰早々大変な事故に遭遇したな。警備部がP-REX (広域緊急援助隊) を出動させた、どんな状況だ？」

玲子が説明すると、「他に非常用ゲートを開ける方法はないのか？」

「天端道路の下の堤体内に、手動のギアボックスがありますが・・・。」

管理支所のスタッフが小声で呟くのを所長が受けて、「全開させるのに最低3時間は掛かります、ハンドルを廻すのに屈強な人手が何人も必要です。でも、何もしないよりは・・・。」

永山が真剣な顔で、「――了解しました、警備部から体力のあるP-REX隊員を集めてもらいます。刑事部の手の空いているスタッフは、下流の避難状況を確認して・・・。」

「手動でのゲート開放が間に合わなかったら、どうなるんですか？」

玲子の質問に厳しい表情で、「間に合わなければ、堤体越流ということになります、越流すれば補強されてない両岸の岩盤にまで水圧が掛かり、崩壊して大惨事に・・・。」

管理支所スタッフの精密な計算により、堤体越流まで2時間半しかないことが確認された、天端道路の下で30名を超える力自慢が、交替で4つのホイールハンドルと格闘し始めた。

「ぎりぎりまで作業させる訳にはいかんな、今から2時間が限度だ。2時間たったら全てを放棄して全員退避だ！――いいな！」

永山が天端道路から、作業を見下ろしながら大声を上げる。

「半分でも開放できれば、時間が稼げるが・・・。」深刻な表情で、管理支所長が呻いた。

その肩を、ダムの反対側を見詰めていた管理スタッフの一人が叩く。

「所長、管理支所のオペレーションルームがあった辺りをよく見てください、奥で計

器類が点滅しているようです・・・。」

崩落した崖に張り付いたように残った管理支所建屋の残骸を、二人で凝視する。

「オペレーションパネルがまだ生きているって云うのか？——誰か双眼鏡を持っていますか！」

地上とヘリからの観測により、オペレーションパネルが奇跡的に殆ど損傷なく機能していることが確認された。

「私をヘリでパネルの前に吊り下げてください！あそこからなら、直ちに非常用ゲートを開放できます！」

所長の進言に、駆けつけたP-REX隊長が首を横に振る。

「部屋の床が完全に崩落して存在しない代わりに、上部に屋根スラブが庇のように残っています。人員をパネル直前に降ろすことが出来ません。崖の表面が非常に脆弱で、ヘリの風圧で再び崩落する可能性もあります。」

「ゲート開放ボタンを5箇所押すだけでいいんですが・・・。」

「天端道路から、開放ボタンをゴム弾で狙撃させたらどうですか？」

玲子が永山に提案する。

「狙撃班か、P-REXで対応できるかな・・・よし、直ぐ手配する！」

永山が黒パト目掛けて走り出した。

秋山たちエアロバイクの訓練隊も、現場を後にすることが出来なかった。

管理支所職員を救助した後、刑事部や消防に協力して、下流の宇治市内上空から、拡声器で緊急の避難を促した。

市内全域の避難が確認された後も、再びあの広場に全機舞い戻り、成り行きを見守っていた。

秋山が再び考える、『P-REXのヘリで無理でも、このエアロバイクなら何とかなるかも知れん・・・救助用担架の上にハーネスで隊員一人括り付けて、屋根スラブの下からぎりぎりまでパネルに近付いて、長い棒でボタンを突っついて貰えば良いんじゃないか・・・どう考えてもこのバイク、災害派遣や人命救助に使うべきだ。深夜の国道で、暴走車両を追っ駆けるのは、やっぱ白バイに任せた方が良くないんじゃないのか・・・。』

救助された後、専ら笑子が世話をしていた自殺志願の女性が、すっと立ち上がって永山の前に進み出る。

管理支所の残骸を指差して、「私を、あの屋根の上にもう一度降ろしてくれませんか？」

」

「―――何を言ってるんですか？」

唐突な進言に、永山も驚きが隠せない。

「私、ボルダリングの西日本チャンピオンなんです。屋根の裏側に、天井板を固定していた架材が幾つも下がっています。私ならあれを伝ってオペレーションパネルまで到達できます。」

即座に永山が、「ご進言は有り難いのですが、いま狙撃隊の準備をしています。それが駄目なら更に他の方法を考えます、民間の方の手を煩わす積りはありません。此処が片付きましたら、本部にご案内しますので、安全な場所で待機願います。」

「私、一度死のうとした人間です。今は何も怖くないんです、命綱だって必要ありません、だから・・・。」

「私たちは貴女を本部に連れ帰って、死ぬのが怖くなるように説得するのが仕事です。どうか此のまま、静観していて下さい。」

温和な男の表情に、僅かな苛立ちが加わった。

案の定、狙撃班の手配は難航した。

P-REXのスタッフにも、そのような技能を持つ隊員は存在せず、管内警察署に所属する全警察官を照会しても、緊急に対応できるスナイパーはいなかった。

京都府の陸上自衛隊各駐屯地にも協力を求めたが、直ちに対応は無理だった。

そうこうする中、大阪府警の**SAT** (特殊急襲部隊) から支援の打診があった。

警察無線を聴いていたSAT隊員が、玲子と同じことを考えていたのだ。

直ちに京都府警から支援要請が発せられ、SATのヘリが現場に到着したのは、30分後のことである。

ダム天端道路をSAT隊員5名と、管理支所長が駆けてゆく。

支所の残骸から30m程の天端道路上で、3人の射手が膝射でライフルを構える。

隊長らしき人物と所長が小声でやり取りした後、隊長の合図で射撃が始まった。

3発から5発ずつ連射するバースト射撃だ、双眼鏡で何度も確認しながら射撃を続ける、射手の判断で少しずつ膝射位置を変える、天端道路は忽ち薬莖だらけになるが、非常用ゲートは動かない。

宇治市の上空が俄かに暗くなり、再び雨が強く降り始めた。

30mの距離でも白く視界がかすむ、現場に集められた全てのアイテムが、乾いた肌を再び濡らし始めた。



遂に永山の無線にSATから連絡が入った。

「駄目だ！角度が浅すぎる、金属製のボタンガードに弾かれて、幾ら撃ってもヒットしないらしい・・・。」

「もっと後退して、正面に廻れば・・・。」笑子が右岸の方向を指差して呟く。

「距離が開けば、ゴム弾の威力が落ちてボタンを押し込めない。パネル真正面の至近距離から射撃する必要があるって云ってる・・・空中から撃ってってことか！無理な相談だ！」

「――出来るかも知れません！」

唐突な声に驚いて振り返ると、秋山が立っていた。

「――君は？」

「交通機動隊の秋山修平です、エアロバイクの訓練中に、この事故に遭遇しました。」

「管理支所の建屋が崩落する前に、私たちを屋根から助けてくれた人たちです。」玲子が説明する。

「空中から、ライフルを撃てるって云うのか？」

「いま私達が訓練していますエアロバイクの操縦席後ろに、人命救助用の簡易担架が固定されています。SAT隊員が其れに座り、付属のハーネスを装着すれば、先程の膝射と同じ姿勢で射撃できると思います。」

「我々がエアロバイクでパネルの直前まで運んで、ホバリングの状態で半転すれば、パネルのボタンを真正面から射撃できます！」

永山の開いた口が暫らく塞がらなかった、呼吸を整えて再度口を開いた。

「――直ぐに準備出来るのか！」

「SAT隊員も空中射撃は初めてでしょうから、少しテストが必要です。600m上昇して下降して、失神しないでいれたら大丈夫だと思います。」

「――SAT隊員に話してくる！」

5名のSAT隊員の内、3名が秋山たちのテストに合格した。

ミッションを実行する6名が早速準備に掛かる、エアロバイクでの取り廻しを考えて、使用する銃器をライフルからサブマシンガンに変更する。

そう云えば何年か前、大津市の琵琶湖疏水取水口で、サブマシンガンを持った一団から命を狙われたことをカップルは思い出した。

雨が再び降り始めたことで、ダム湖への流入が増加する懸念があった。

ホイールハンドル作業班を更に20人増員して対応する、事故に臨場している警察官、消防隊員、P-REX、機動隊員、刑事、全員に招集が掛けられた。

エアロバイク3機の準備が整い、広場から離陸する段になった。

管理支所長が6名に向かって大声で伝える、「――いいですか、先程も云いましたが繰り返します。まずオペレーションパネル中央にある、赤白ストライプ表示の中の4つの青いボタンを押し込んでください、ちゃんと押し込めたらボタンそのものが青く点灯します。4つとも点灯したら、直ぐ上の紅いボタンを押し込んでください。半球形の大型のものですから、すぐ分かると思います。誤操作防止の為、何れのボタンもストロークが深くなっていますので、作動しない場合は連続して命中させてください……。」益々雨が酷くなり、風も出てきた、グズグズしていると条件がより悪くなる。

所長の話もそこそこに、3機が一斉に離陸する。

ダム堤体上空で旋廻し、ゆっくりと管理支所の建屋残骸に接近する。

教えられた通りにホバリングの操作に入るが、風に煽られて安定しない。

180度回転して、SAT隊員をパネルの方向に向けようとするが、左右に流されてひと処に留まれない。

SAT隊員もハーネスに掴まっているのが精一杯で、銃を構えて照準するどころの話ではなかった。

「——無理だ！風が治まるのを待とう！」双眼鏡を覗いていた永山が、大声を上げて判断を下した。

雨に煙る右岸の広場を、雨を避けて人々が走り廻っている。

落ち着く先が決まると、決まって暗い空を恨めしそうに見上げた。



「堤体越流すると、実際どうなるのですか？コンクリートのダムが決壊するんですか？」

笑子が、立木の下に走り込んで来た管理支所スタッフに話しかける。

「ダム本体は、スランプがほゞ0cmで、水量の少ない高強度のコンクリートで出来ていますので、決壊することは無いと思います。まず、ダム全体が水没することで、堤体のメンテナンスが全くできなくなります。」

「――メンテナンス？」

「コンクリートダムは、堤体内に様々な配管や配線、人が通るメンテナンス用通路が存在します、これらが全く使えなくなる。沈没した船と同じですね。それと、越流した水が決められた放水路を流れ下るだけなら問題無いんですが、ダムのそこから中から流れ出します。特に兩岸の岩盤部分から越流すると、そこはダム本体が接する基礎部分と違い、構造的な補強をしていません。幾ら強固な岩盤でも膨大な水量に抗しきれず、岩盤崩壊を起します、

凄まじい土石流が一気に流れ下り、下流域を徹底的に破壊します。この天ヶ瀬ダムがもし越流すれば、宇治市全体が被災地になります。」

「国宝・世界遺産の平等院は？」

「―――跡形も無くなるでしょうね。」

堤体内でホイールハンドルと格闘している作業班から、永山に無線が入る。

「―――作業開始から2時間だ！ダム湖水位の変動は？」

「まだ上昇しています！手動でゲートが1/4程開いているんですが、それ以上に雨による流入が増えているようです！」

すぐ隣に控えていた管理支所長が答える。

「このまま雨が止まらずに推移した場合、堤体越流となるのは？」

「―――1時間後です！」

「彼らの力で30分稼げた訳だ！」

腕を組んで考え込んでいた永山が、黒パトの無線マイクを取ると、「あと30分！あと30分頑張ってくれ——！」

空は、無情にも更に暗くなりつつあった。

右岸の広場上の棚には、狭い山道を乗り越えて、大型の電源車が2台到着している。秋山たちのエアロバイクも、全固体電池の容量が底を尽きつつあった。

幸いにも全固体電池はそれまでの2次電池と較べて、クイックチャージ(急速充電)が可能である、到着した電源車一台でエアロバイク一機にチャージするのに15分、3機だから30分で充電できる。

永山の指示で、同じ30分なら1機追加して4機充電することにした。

不慮の事態に対応する予備的措置と、その時は受け取られた。

SAT隊員からも要望があった、再挑戦するなら簡易担架に俯せの状態から、伏射でチャレンジしたい、射撃の精度が上がるというのだ。

これにより、ホバリング後90度回転になり、秋山たちも目標を目視しながら、機体を微調整出来るようになる。

突然西の空に稲光りが広がった、周囲を震わせて雷鳴も届く、状況は絶望的に見えた。自殺志願の女性が、笑子の顔をじっと見つめている。

「———どうしたの？」

笑子が尋ねると、「わたし、もう死なない・・・必死で勉強して政治家になります！」

「急に・・・なに？」

「私の不倫相手の代議士も、土木官僚上りなんです。こんな危険な場所に、ダム造らせたのは国交省の官僚なんですよ！あんな男が土木行政牛耳っているから、こんな大事故になるんだわ！もし、平等院が流されたら、あいつ等のせいだから・・・私、政治家になって彼らの罪を糾弾します！」

多分に恋愛感情を伴った憤慨ではあるが、「———そうよ、その怒りが大切よ！人間怒ってる間は、死ねないからね！」

上下2段になった広場の、警察車両が近くに並ぶ上の棚の立木の下で、秋山が雨に濡れながら佇んでいた、黒パトの助手席ドアを開けて永山が招き入れる。

「君たちも大変だな、白バイ勤務の傍ら、エアロバイクの訓練をしているんだろ？」

「もう半月以上続けていますので、慣れました・・・。」

渡されたタオルで頭と顔を拭きながら、秋山が答える。

「白バイの替わりなるのかい？あのバイク・・・。」

「―――ならないと思います！でも私たちにとって、白バイよりももっと有用なツールかも知れません。」

「―――と云うと？」

「白バイでパトロールをしていると、日中夜間を問わず、必ず急病人に遭遇します。警察官だから安心して云って来るんでしょう、119番に連絡して対応するんですが、中には緊急に搬送しないと助からないような急病人もいて・・・白バイじゃ搬送できないんですよね。」

「エアロバイクに付いている担架のことか？」

「そうです・・・もう、白バイで暴走車両を追い掛け回す時代じゃないのかも知れません。殆どの自動車が自動運転に対応して、街中じゃ暴走しようにも出来ない状態です。」

「―――そうだな、都市の信号が自動運転と連動する様になって、自分の意志で車を運転できなくなった。」

「私達警察官は、治安や犯罪よりも、災害対応と市民サービスに軸足を置くべきなのかもしれません。」

黒パトの車内が急に静かになった、何事かとドアを開けて外を見る。

まだ雨は降り続けている、しかし風が止んだ！ピタッと止んで無風状態だ！

秋山が自分のエアロバイク目指して走り出す！他のパイロットも走り出す！SATのスナイパーも同じ方向に走り出す！

永山が大声を出す、「——全員準備に掛かれえ！エアロバイクを離陸させろお！再挑戦だあ！」

雨の下の広場が、再び騒然とし始めた。

波の無いダム湖に雨だけが静かに降っていた。

水位は確実に増え続け、ダム天端道路が少しずつ冠水し始める。

作業が続くホイールハンドルの床も、水没し始めた。

永山が、黒パトの無線マイクを掴む。

「ゲート開放手動ホイールハンドルの作業を終了する。皆よくやってくれた！全員撤収退避、ダムから離れろ！」

アーチ状の天端道路を、50余人のスタッフが駆けてくる。

それを見ながら、管理支所長が近付いてきた。

永山が振り返って呟く、「エアロバイクに全てを賭けます……。」

「——分かりました。」

準備が整い3機が離陸する。

降り続ける雨は最早気にならない、時間は15分まだ充分に残されている。

ダム堤体上空で旋廻して、建屋残骸前に3機が並ぶ。

ホバリングしながら慎重にオペレーションパネルに近付く。

90度回転して、非常用ゲート開放ボタンの正面に対峙した。

SAT隊長の右手が上がる、射撃開始だ——。

開始早々一番左のボタンが青く点灯した、右端のボタンもそれに続く、なかなか幸先がいい。

しかし、続く2つがなかなか点灯しない、非常用ゲートは4つとも点灯させて、上の紅いボタンを押し込まないと開放されない、焦りが少しずつ頭を擡げてきた。

俯せのままサブマシンガンのマガジン(弾倉)を交換する、バースト射撃でも銃弾は直ぐに無くなる、マガジンの予備数が頭を過って、焦りが深まる。

「——堤体越流が始れば、この広場も水没して危険です！全員上の棚に移動してくだ

さい！」

射撃を見詰める広場の全員に向けて、管理支所スタッフが移動を促している。

カップルが永山の腕を引いて後退させようとする、「——あっちじゃ射撃の様子が見えん、俺は此処に残る！もし俺が流されたら、後の指揮はお前が執れ、いいな黒木！

」



「エークソッ！ボタンに命中させても、押し込むことが出来ん！」

SAT隊員の苛立ちが、操縦席の背後から聞えてくる。

操縦桿を細かく操作しながら、秋山が上体を振じって叫ぶ。

「——ギリギリまで近づけます！」

「屋根スラブに接触するぞ！」

「プロペラ2つまでなら、破損させても自動的にバックアップします。屋根の下に何とか潜り込めれば……。」

必死の形相で機体を前に進める、カーボン樹脂の玉籠がスラブの先端に押し付けられて変形している、プロペラの一つが耳障りな金属音を残して吹き飛んだ。

屋根の下に入ったところで機体を安定させる、ボタンは目の前5m——。

バースト射撃が3回連続する、残る2つのボタンが青く点灯した。

「——限界だ！離脱します！」高度を落として離脱した。

残る2機が紅いボタンを撃ち続ける。

3分後永山の無線に連絡が入る。

「——3分撃ち続けてもびくともしません、銃弾が無くなります！」

すぐ隣にいた管理支所スタッフが、「——所長！あの紅いボタン、拳で思いっきり叩かないと——。」

「もう一度屋根の下に潜り込めないか！」永山がマイクに叫ぶ。

「無理です、スラブの下では揚力が維持できません！」

秋山の悲痛な叫びが黒パト無線に響き渡る。

広場を見渡した永山が、再びマイクを手にして、「——4機目頼む、最後の手段だ！

」

広場の上の棚から、一機のエアロバイクが離陸する。

担架には一人の見慣れぬ男性が座っている、長身痩せぎすで、手足が異常に長い。まるで蜘蛛のような体形の男だった。

「あっ！あれは――。」玲子が短く叫ぶ。

ダム堤体上空を大きく旋回して、射撃を続ける3機の後ろに着ける。

「射撃中止！前を開けてくれ――。」永山がマイクに叫ぶ。

後退していく3機を横目に、蜘蛛男の4機目がオペレーションパネルに近づく。

担架から立ち上がり、カーボン樹脂のランディングギアに両足を踏ん張って、上半身をぎりぎりまで振じると、振りかぶった右腕を鞭のように撻らせ何かを投げた――。

矢のような弾道で紅いボタンに命中、そのまま粉碎して弾き飛ばした。

見守る全員の喉の奥から悲鳴が絞り出される。

その直後、ダムの非常用ゲートが大きく軋んで全開した。

真っ白い水の塊が、4か所の洪水吐きから一斉に排出される。

堤体直下の減勢工・水叩き、下流の副ダムに跳ね返って、巨大な水柱となって周囲に降り注いだ。

ダム湖の水位が見る々下がっていった。

「―――諸君に、刑事部の新任スタッフを紹介する！」

府警本部の刑事部屋である、永山がにやけた顔で新人を紹介している。

隣には、長身で細身の黒人男性が、スーツ姿で所在無げに立っていた。

「ジョン・カイリング・クアリ君だ、昨日付けで着任したが、天ヶ瀬ダムで皆に紹介できなかった。思い当たるスタッフも多いと思うが、ジョン・クアリ君は5年前の南スーダンPKO帰国自衛官の事件の当事者だ。器物損壊罪で逮捕されたが家庭裁判所で不処分となった。当時17歳で未成年だったが、難民支援機関の援助によって、日本の高校に編入することが出来た。英語が堪能で、日本語も日常困らない程度に会話できるそうだ。まあ、その辺り後見人の富樫憲次氏の教育の成果だと思う。」

「高校卒業後、警察官を志し京都府警察学校へ入校した。10か月の研修を修了して、昨日我々が刑事部に着任した訳だ。捜査一課一係に配属とする、黒木係長よろしく頼む。」

永山に促されると、「セイイッパイ頑張リマス・・・宜シクオネガイシマス・・・。」長身を折り曲げながら、たどたどしく日本語で挨拶した。

「―――着任早々、大手柄だったわね！」

姉御肌の玲子が歓迎すると、刑事部屋の空気が一気に沸き立った。

「ダムサイトの広場から見てましたが、エアロバイクから何を投げたんですか？」若い刑事が早速質問する。

「―――石に決まってるでしょ！彼は石しか投げないのよ。」

笑子がドヤ顔で応答する、憧れの視線をジョン・クアリに投げかけている。

一件落ち着いた刑事部屋は、何時になく平和だった。

自殺志願の女性の事情聴取は、玲子が担当した。

不倫相手の若手代議士とのこと、自殺しようとした動機、ダムの事故に最後まで立ち会って人生が変わる程感動したこと、ボルダリングの話・・・何かが剥がれ落ちたように饒舌に話した。

「―――貴女はもう大丈夫ね、此れからどうするの？」

「大学に帰って、学部を文学部から政経学部に変更できないか相談します。」

「本当に政治家になるつもり？」

「なれるかどうか分かりませんが・・・その方向で努力してみます。」

「これは私の知合いの、ロボットを造ってる或る実業家の話なんだけど、今は自分に頼る時代だって・・・今まで人は、自分の欲求を満たすために、他人や企業の為に働いた、つまり他人や企業に頼っていた時代。此れからは、自分の欲求を満たすために、自分

の為に働くべきだって云うの。」

「その人はね、世の中の価値は元を辿れば全て人件費、人々の労務の価値以外の価値は存在しないって・・・林檎を食べたいからって、リンゴの木にお金を払わないでしょ、ガソリン給油しても油田にお金払わないわ、全てそれに関わる人の労務に払ってるの。」

「でも、アラブの王様の利権にも払ってるんじゃないですか？」

「利権だって誰かが武力で保護しないと維持できないわ。」

「そして人の労務は、少しずつロボットや機械に代替されていく・・・世の中の全ての価値は、やがて消滅するって云うの。」

「希少価値はどうなるんですか？金や宝石、石油だって枯渇すれば・・・。」

「それが希少だって、人々に啓蒙して価値を生み出すのも人の労務、それに代替する資源を探し出し、製造方法を生み出すのも人の労務・・・。」

「要するに、国や社会、企業や団体、利権や権威に頼らないって話ね、政治家を志すのは貴女の自由だけど、他の政治家や有権者を頼っちゃ絶対駄目よ！」

「分かりました、肝に銘じます・・・。」

秋山修平は、エアロバイクの訓練を修了し、本来の白バイの職務に戻っていた。

今日も国道上の事故処理で、半日忙殺された。

119番通報で救急車が到着するまでに、意識のあった被害者が1人亡くなった。

遣る瀬無い気持ちいっぱい、本部に帰ってきた。



机上のパソコンを起動すると、国土交通省近畿地方整備局・淀川ダム統合管理事務所名義で、京都府警本部を經由して、感謝のメールが届いていた。

僅かに救われた気持ちになった。

交通部からエアロバイクに関するレポートの依頼が入っている、当該装備の今後の運用に関し、建設的な意見が欲しいという。

給湯室でコーヒーを入れて、暫らく考える。

ほっと息をついて、徐にキーを叩き始めた。

『私達交通機動隊員は、長年白バイによる交通取り締まりの職務に就いています。その

経験から鑑みますと、エアロバイクが白バイの任務をそのまま代替するのは適当でないと考えます。と云って全く運用できない訳ではなく、白バイとの任務の棲み分けが必要です。他人を巻き込んだ事故を起させない為に、暴走車両を取り締まるのが白バイで、起きてしまった事故から、暴走車両の運転者をも含めて怪我人を救いだすのが、エアロバイクの役割だと思います。両者が一体化して、単一の装備となるのが理想ではありますが、それがまだ無理な段階に於いては、密に連絡し合い相互に連携して、任務を全うする必要があると考えます。警察官の最も重要な任務は、人を逮捕することではなく、人を救うことだと確信します。』

———我ながら、模範解答だ！

鴨川の川面に夕日が紅く映えて、平和な一日が終わろうとしていた。

———終わり。

以上全てフィクションです、登場する人物・団体等たとえ名称が共通していても、実在のものとは一切関係がありません。悪しからずご了承ください。また、天ヶ瀬ダムは現在トンネル式放流路を建設中であり、放流における危険性は今後軽減されるものと考えます。

尚、添付した写真は、PhotoACから転載させて頂きました。

カップルは、何度でも復活する。

<http://p.booklog.jp/book/124621>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/124621>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト